



福祉系

対人援助職養成の

現場から 54

西川 友理

“こどもなど”始動！

2020年の春、本マガジンの40号で「保育者の対話の場を作りたい」という話を書きました。「今、保育幼児教育現場では『アクティブラーニング』ってよく言われるけれど、主体的で対話的な保育の場、って、今ホントにどの保育現場でも出来ているのかな？まず保育者がその『対話の場』を、それも『安心・安全を感じられる対話の場』を経験することができているのかな？だってこんなに人間関係で苦しんで泣いて辞める人たちがいるのに……」という思いを込

めました。

それから、3年。今年2023年7月、私は保育業界初心者のための対話の場「子どもに関わる大人等の会」、通称“こどもなど”の第一回目を開催しました。

対話の場に「保育」の人が来ない

すでに支援者のための対話の場を定期的で開催していた私ですが、この3年間、いやその前から、「なぜこういう対話の場に、保育現場の人は来ないんだろう」とずっと考えていました。

高齢分野や障害分野、低所得者支援等の分野の方は結構参加されます。また、子どもの分野でも障害児分野の支援者の人は参加されることがあります。しかし、保育現場で働いていらっしゃる方はなかなか参加されません。

“こどなど”に至るまで

ひとりで考えていても埒が明かんなと、私は様々な人に相談してみました。

参加した学会では、対話が必要だ、対話が大それたという発表をされた方に伺いました。保育者養成校の先生方にも伺い、保育現場の先生方にも伺いました。哲学対話の場、当事者研究の場、子どものワークショップをしている方にも伺いました。

「保育者の人が、対話の場に来ないのはどうしてなのでしょう。」

多くの人の返答はこうでした。

「いや、絶対に必要だと思いますよ、そういう場！」

「私も、そういう場、大事だと思います、応援しますよ！」

みなさん、かなり前向きに、とても好意的に受け取ってくださいます。

そして“必要”とおっしゃるのです。

「きっと、西川さんがそういう場をしてるってこと、皆知らないだけじゃないですか」

「もっと宣伝したら？」

そういう声もありました。

そこで、あらゆるところで、ピラをま

いたり、宣伝したり……しかし、どうも手ごたえがありません。

高齢分野、障害者分野の方の参加は増えましたが……うーん、努力が足りないのでしょうか？マーケティングが下手なのかな？

現在保育現場で仕事をしている卒業生にも「こういう場があったら、参加したいと思う？」と聞いてみました。

「うーん、休みの日は、休みたい……」

「わざわざ、行きたいかっていうと、正直言って、寝てたい（笑）」

「それか、遊びに行きたい！わーって、発散したい！」

「休みの日には疲れてそれどころじゃない……」

という彼ら、彼女ら。

「……あー、まあ、そうだよねえ。そうなるよねえ。」

苦笑いの西川です。

そのくせ、卒業生個々からは連絡が来ます。

「先生、しんどい。」

「もうやめたい……。」

「これこれこういうことがあって、すごく難しい。どうしたらいいかわからない。」

ひとりひとりの話を聴き、話をします。その後、「良かったらこういう場があるけど、来ない？」と、対話の場の紹介をします。

「あー うん、はい、また機会があったら。」

…どうも、気乗りがしない様子です。

「いや、無理に誘ってるわけじゃないの

よ、でも、ええと、気乗りしない、かな？」
「知らん人もおる中で、そんな話出来ないです……」

「どんな人がおるかわからんし。」
「私は誰かに聞いてもらいたいわいって言うより、先生に話聞いてもらいたかっただけやから。」

そしてまた、数か月後に電話をしてくる彼ら、彼女ら。

「……あー、まあ、そうだよねえ。そうなるよねえ。」
ふたたび、苦笑いの西川です。

あたらしい仲間、まみちゃん！

そんな試行錯誤を繰り返す日々、子どもに関わるアート活動の場で、ある人に出会いました。

「めっちゃわかる。保育者にそういう場ありますよ！ていうか昔、そういうおしゃべりの場をつくってみたけど、見事に誰も来なかったんです。」

この人は、向井真美さん。フリー保育士をしていらっしゃいます。

子どもにも「まみちゃん、まみちゃん！」と大人気。面白くてかっこいいお姉さんです。

（やっぱり、場を作っても保育者は来なかったんだ……！）

驚いた私は、彼女から詳しく話を聴きました。

…真美さんは、ご自身がとある園で働いている時に、とともしんどい目に会っていたそうです。でも、すぐに辞める、

という事はしなかった。一生懸命頑張った。けどどうしてもしんどくなってしまふことがあった。

「そういう時ってどうしてたんですか。」

「ええと、保育現場で就職した元クラスメイトと、どんちゃんさわぎやら、暴飲暴食やら……。」

「ああわかる！そんなことしたした、私も！」

でも、それはあまり健康的な発散とはいえなかったと言います（そして私も身に覚えがあります……）。

「どんちゃんさわぎの最中に、友達と話したりするんですよ、仕事の話も。でもそれは単なる愚痴で、ムカつくとかうっとおしいとか、ハラ立つとか、そういう話ばかりで、何も建設的じゃない、ただのうっぶん晴らし。それがまったく意味がないわけではないとも思うんですけど、でも……。」

ちゃんと話す場が、というか、ちゃんと話を聴いてもらう場が欲しかった。だから、一度そういう場を作ってみたというのです。

「保育現場で働いている人、みんなで話そうよ！」

日時会場を設定して、SNSで告知して、いざ開催！…したけれど、一人だけしか来なかった。その一人も、保育者の人ではなかった（この人はこの人で、またとても面白い人だったので、それについてはまた別の機会に書きます）。

「なんでや?!みんな、要らないの、そういう場?!」

思わずつぶやいた真美さん。

「…ちょっと待って真美さん、一緒じゃないですか、私の経験と。」
「え、そうなんですか?!」
「うん、めっちゃ似てる。というか『なんでや?!みんな、要らないの、そういう場?!』って、一言一句たがわず、私も言ってる。」
「え————! そうなんや!」

「さて、なんでなんやろか」

というわけで、唐突に「保育者が語り合う場があると思うけど、なぜかうまくいかない問題」仲間が増えました。

真美さんが考えたのはこう。

「働き始めた最初は、みんなしんどい、と思ったり、自分の職場で“学校で、勉強してきたことと違う”“保育ってもっとこういうものはず”とか、感じると思うんですよ。けどとにかく、日々の仕事をこなしていかなきゃいけない。そのためにはとにかく上の人のいう事を聞いて、その職場で“生き抜いて”いかなきゃいけない。目の前の忙しさの中で紛れて、疑問を持つ前に、とにかく動かないと、日々の業務が動いて行かない。」

「頑張って頑張って、たまの休みはもう倒れてしまって、何をやる気も起きない。あるいは、どんちゃん騒ぎなどで、うっぴん晴らして終わらそうとする。」

「しんどさを解消させること優先で、“保育って?”とか“子どもと一緒にいるって?”ということに、向き合う

余裕がないのかもしれない。」
それは、私の感覚とも合致しました。

私の感覚

本マガジンの40号に以下のように書きました。保育者だけの対話の場を作る、という事を思いついたころです。そのアイデアを保育士として働いている友達に話してみました。

.....

すると、

「うーん…保育士ってあんまり孤独やないからね…。」

とのお答え。

「どういうこと?」

「女の人が多いし、なんだかんだ言っておしゃべりするから。別に対話っていう場がなくてもええんやないかなあ」「そう…いいアイデアやと思うんやけどなあ」(本連載40号より)

.....

そう、職場が「おしゃべりする」場所である人は、そこでおしゃべりが出来て、その職場にいることができるのではないかと、思うのです。

問題は、そうじゃない人たちです。

1年で職場を辞める人たち

厚生労働省の令和2年度の統計によると、新卒社会人の3年以内の離職率は25%、このうち1年以内に離職した人は約半数の11%となっています。ところが、保育士の離職率は3年以内で離職率50%近く、1年以内の離職率は25%となっています。他業種と比較しても、結構早いうちに、その職場を辞めてしまいます。

さらには、2023年3月に発表された令和4年度版「東京都保育士実態調査」によると、離職理由の第一位が「職場の人間関係」となっています。前回調査、平成30年も同じ理由が1位となっています。

私の友人が言った、「女の人が多いし、なんだかんだおしゃべりするから。」という理由はとても大きいと思います。つまり、「人間関係がばっちりハマって、園の文化になじむことができ、その園で“なんだかんだおしゃべりする”波長が合うかどうか」が、その仕事を続けていけるかどうかのポイントになるということです。

同じく本連載40号で、「保育者は他者との違いを受け入れることがもしかしたら難しいのかもしれない」と書きました。

.....

……しかし、保育分野は、誰かや何かとの違いに出会うと「出来るだけ同じ部分、共感できる部分」を探して、それに寄りそう努力をする。そうして「共有する対

話」に結論を持っていこうとする。それが「安心・安全な場の確保」につながる方法になる、という論理が存在しやすい場なのではないかと思うのです。（本連載40号より）

.....

子どもや保護者にとって、何とか「安心・安全な場」を作ろうとしている保育者たち。その保育者たち自身に「安心・安全な場」が確保できないと、まずそういう場を作るための精神的な安定が得られません。その園が自分のコミュニケーションパターンと合致する人間関係が築ける場だと、安心してその園に「居着く」ことができるのではないのでしょうか。すると「居場所」を見つけたという状態になります。あるいは、その園の文化に「出来るだけ同じ部分、共感できる部分」が多い自分になろうと、つまりその園の文化になじんでいこうと努力する。居場所としての職場を見つけることができた、あるいは園の文化になじめた人は辞めない一方、どうも自分のコミュニケーションパターンと合致する人間関係が築けない、ここは「居場所」ではない、と感じる人は辞めていく。自分の居場所でないと感じるところに長く居るのはつらいものです。だから「早めに辞めて、次の職場を探す」。

「だれかにとって居心地のいい居場所」は一方で排他的になりがちなのかもしれません。また、いったん「居心地がいい、安全・安心な場」に居られる自分になったら、その場を揺るがすような「保育ってこれでいいのかな」「もっと

こうしたらどうだろうか」と、場を変化させるようなことを考えるのは、危険だと考えられる場合もあるのかもしれない。

.....

「違う部分がある、どうしても相いれない部分がある。だけど、いや、だからこそ、あなたと共にいたい」「違いがあるからこそ、お互い一緒に変化しあうことが出来る、この社会でいっしょに生きていける」といった視点は、もともと保育や幼児教育の場面では言われているはずなのです。その手法は、出来るだけ共感的で安定的な場を作る、という方法ではなく、いつでも不安定でいられる、変化できるという安心と信頼のある環境の確保が出来るような方法をとるほうが、子どもにとっても、保育者にとっても、生きやすい場になるのではないかと感じるのです。（本連載40号より）

.....

もともと異質な、違う園の、全然知らない人と会う機会や、「うちの園はこうだから」「保育者ってこういうことをする人だから」という園内文化を「本当にそうかしら」と見つめる機会、これらはとても大切であると考えます。しかしそれはもう「自分の働く園」に染まり切ってしまうと、もしかしたら難しいのかもしれない。まだ園の文化に染まり切っていない段階で、「〇〇園の保育者」になる前に、「保育者としての自分」を探

っていく場として、対話の場をつくる、というのはどうでしょうか。

どんな人の場をつくる？

以上を踏まえて、真美さんに提案してみました。

「もし場を作るとしたら、まだ職場になじんでいない、1年目、2年目の人たちの場にしたらどうでしょうか？」すると真美さん、ちょっと考えて、答えられました。

「うーんそれもいいけど、私、学生のうちからやったらもっといいと思うんです。」

「えっ、学生のうちから！……なるほど、確かに！」

「まだ全く現場の雰囲気にならないうちから、青田買い笑！！」

「青田買って笑！！でも確かに、学生のうちから“自分と違う考えの人と一緒にいる場も居心地がよく居られる”というお作法を体感できる場を持つておくって、いいかも！！」

はじめる事、続ける事

とにかくこうじゃないかな、ああじゃないかなと色々考えていたのですが、具体的にこの春、

「よっしゃ、とりあえず、やってみよか！」

と始めてしまいました。

スタートまでに3年ですよ、3年。あんなんという亀の歩みでしょう！でもとにかく始めてしまったのです。

「どこでやってるのかわからん」

よし、では、チラシ以外でも、Twitter（現X）でも告知しようじゃないですか。もちろん、チラシを撒ける所なら、どこだって持っていきますよ。

「休みの日には寝たい」

よし、では、オンラインでも開催してみようじゃないですか。ギリギリまで寝てよ、なんだったら布団の中から参加してよ。

色々手探りが始まります。

そして私は、このマガジンのおかげで、「続けること」の意味を知っています。あまりたくさん集まらないかもしれませんが。でも、必要な人がいるという感じはしています。少なくとも、私や真美さんは、1年目にそういう場が欲しかった。続けてさえいたら、必要とする誰かに、いつかご縁が繋がるかもしれません。そしていずれは、私達の手を離れて、参加者の皆さん自らが場を作っていくことを目指して。

というわけで皆様、そして皆様の周りの方に、どうぞお知らせくださいませ。以下、告知です。

.....

【子どもとかかわる大人などの会 “こどなど” ～関西の保育現場初心者、集まって話そうよ～】

保育実習生、そして子どもと関わる仕事をしている1年目～2年目くらいの人、ちょっと吐き出していかへん？

「実習が不安！」「指導案ってこれでええん？」「働き始めたけど、ちょっとキツイいわ～」「これって他の園や施設はどうしてるの？」「私が目指す保育ってね…」「この前子どもがこんなことしてさ…」等、他の養成校、園、施設のみなどと話してみませんか。

現役フリー保育士&保育士養成校スタッフが、「初心者こそ、そういう場、いるんとちゃうん？」と考えてつくった場です。色々考えちゃう人、とりあえず話そう。

日時）2～3か月に一度、日曜日に開催。次回は11月か12月に開催予定。

場所）大阪メトロ谷町線 太子橋今市駅から歩いて5分のコミュニティスペース（連絡くださった方に直接場所をお話します）

料金）100円～200円くらいのカンパ、あるいはみんなで食べられそうなお菓子を持ってきてください。

お問合せ & 参加申し込み）西川（lily_n@hotmail.com）にメールするか、Twitter（現X）で「NY【支援するひとの対話の場】@NY20220222」を検索の上、DMください！

.....

以上です。よろしくお願ひします！